

(5) 希少種の特別調査

(パプロ)

平成 23年度から、あきる野市内に生息するトウキョウサンショウウオ、トウキョウダルマガエル、クマタカ、ハチクマ、サシバ、オオタカの生息状況などの調査を行っています。

トウキョウサンショウウオについては、産卵期中に市内の生息場所を確認し、産卵状況を調査しています。産卵及び成体数の記録から、被害及び環境状況の確認まで行っています。トウキョウダルマガエルに関しては、平成 24年の産卵期に合わせて生息場所や分布の確認を行いました。今後は、この 2種類や同様に絶滅の危険性が高まっているアカハライモリの詳細調査が必要と推測されます。

重要猛禽類である、クマタカ、ハチクマ、サシバ及びオオタカについては、個体数や分布及び繁殖状況などの調査を実施しています。この 4種類は、あきる野の自然や生態系のバランスと深く繋がっている貴重な動物であると思われます。広い範囲で環境の変化や悪化があった場合には生息ができなくなり、自然のバランスが崩れる恐れもあります。

なお、これら指定した種類以外にも多くの希少種の生息場所などを記録しています。今後は他の種の特別調査を行い、生息場所や環境の保護、または復興方法などを検討していきます。

① トウキョウサンショウウオ調査

平成 23年からは両生類調査の一環として、トウキョウサンショウウオの産卵場所、卵のうや個体数の確認を行っています。この調査結果により、五日市周辺のエリアは最も良好な状況であり、非常に重要な産卵場所が存在しています。一方、近年は産卵に適した場所が減少した網代の丘陵地帯及び草花丘陵の菅生地区などのエリアでは、非常に深刻な状況にある事を確認しました。

平成 23年の産卵期には、17箇所産卵場所を確認しましたが、平成 24年の産卵期には、調査を強化し、市内で 31箇所産卵場所を確認しました。また、かつてトウキョウサンショウウオが産卵していた 4箇所産卵場所では、産卵が確認されなくなりました。結果的に、平成 24年の産卵期では 565個の卵のうを確認することができました。その後、平成 25年（現在）は 41箇所調査し、1271個の卵のうを確認しました。平成 24年から市や保護団体が強化している外来種対策活動の成果により、生態系が守られた場所で卵のうが増加したことを確認しています。一方、産卵が見られなくなっている地点は 8

箇所となりました。

サンショウウオを取り巻く問題などの被害対策として、15箇所産卵場所の保護活動を行いました。24箇所トウキョウサンショウウオの成体や卵のうが哺乳類などに食害され、人による採集被害や密漁にあってることが確認されました。また、環境悪化、水系の問題、乾燥などにより、卵のう及び幼生の乾燥や病気感染に伴う死亡が多少確認されました。

トウキョウサンショウウオが深刻な状況にあることが確認されていることにより、調査や保護活動の強化が必要とされています。



繁殖期中の産卵場所で集まるトウキョウサンショウウオの様子



(右左) アライグマの被害を受けたトウサンショウウオの成体や卵のうの様子



産卵場所の乾燥による被害の様子（卵のうの様子）

② トウキョウダルマガエル生息調査

あきる野市内では、トウキョウダルマガエルはほとんど水田の環境でしか生息しない状況です。確認された 12 エリア中で、9 エリアは秋川や平井川の河川区域に位置しています。他の生息地点は鯉川や横沢入りの区域内で確認されました。2 箇所の生息地点は緩い流れのある水路などの様な環境でしたが、それら以外は、田んぼなどの中で観察されています。かつてから、水田の少ないエリアであるあきる野では、近年の土地利用の変化や環境悪化の影響により、生息区域の分断や縮小が発生しています。このことから、トウキョウダルマガエルが生息できる場所は現実的に少ないと思われます。トウキョウサンショウウオと同様の状況であり、生息エリアは密接しなくなって個体数が減少し、本来の遺伝子の悪化が予想されます。そして対策及び保護活動が行わなければ本種があきる野で絶滅することも危惧されています。



トウキョウダルマガエルの卵塊（左）と生息環境の様子（右）

③ クマタカ生息調査

クマタカは全国で1600個体しか生息していないと言われている希少な猛禽類です。市内の調査結果により、2年間で3から4つがいを含め、12個体程度が小宮地区及び戸倉地区の山地を中心に生息している事を確認し、2つがいのモニタリング調査においては繁殖に成功していることも確認しています。

クマタカの餌となるノウサギ、ヤマドリ、ニホンリス、カケスなどの動物や、好む森林類が存在することから、あきる野の奥山はクマタカの重要な生息環境となっており、個体数は比較的が多いと思われます。クマタカが頻繁に利用する森林は広葉樹林及び針葉樹林を含む森であり、開けた環境が近辺にあることも多く見られます。これは、大型猛禽類として広いエリアで狩り及び営巣や警戒ができる森林を必要としています。また、その多様な生息エリアの中で季節に合わせ、更に頻繁に利用する森のタイプが異なる様です。特に、夏は過密的な広葉樹林内では移動や狩りができないと思われませんが、冬季は針葉樹林より広葉樹林の方がクマタカの活動に適していると思われれます。

保全行動に対しては、林業活動及び山や登山道のオーバーユースはクマタカの活動に大きな影響を与える恐れがあるため、注意すべき場所も見られます。また、確認されている営巣や営巣に適しそうな樹木や森林の保護が必要です。現在、森林レンジャーはその保護活動に取り組んでいます。



市内で確認されたクマタカの幼鳥(左)とクマタカに適した生息環境の様子(右)

④ ハチクマ生息調査

ハチクマは夏鳥で、渡りの季節以外には6月から9月まであきる野に滞在し、繁殖を行う年もあることを確認しています。

平成23年の夏季に市内で活動していた6個体を確認しました。1つがいのみが繁殖を行い、他の個体は市外で繁殖した、または一時的な滞在関係だったと見られました。繁殖したつがいの巣や2羽の幼鳥の巣立も確認できました。

一方、平成24年の夏では3個体を確認しましたが、定着やペアリングが見られることはなく、繁殖も行われなかったと思われます。繁殖エリア周辺で、同年に行われた森林の伐採範囲の拡大はハチクマに影響を与えた可能性があります。

スズメバチの仲間が多い場所を好みながら、生息に適した森林も必要とします。市内では、生息環境保護のために留意する必要はありませんが、森林の広い範囲で伐採や山火事などの急激な変化が発生する場合は、ハチクマの営巣地や重要な行動圏に当たり、大きな影響を与えてしまうことが考えられます。東京都では数少なく、大変重要な猛禽類であるため、今後もモニタリング調査は必要です。



ハチクマの親子。クロスズメバチの巣を運ぶオス（左）と幼鳥の様子（右）

⑤ サシバ調査

ハチクマと同様にサシバは夏鳥で、4月から10月まであきる野で見られます。特に、渡りの季節で記録していますが、市内では毎年1～2つがい程度が繁殖していることを確認しています。

里山環境を最も代表する猛禽類で、この環境の悪化や減少に伴い、当エリアに繁殖するサシバの数が減りました。トウキョウサンショウウオやオオタカなどの希少種と同様に人間に密接している種類であるため、人間の活動に影響される恐れが非常に高く、今後は色々な場面で注意する必要があるとされる種類です。

現在、モニタリング調査や営巣地の保護に取り組んでいます。



子育て中で、ヒバカリと思われる蛇（左）とトウキョウダルマガエル（右）を運ぶサシバオスの様子

⑥ オオタカ調査

注目されてきたオオタカは、減少の恐れや被害などに伴う保護活動は全国で見られていますが、近年はオオタカの数と思われるより多く、「都市型のオオタカ」は増加しているとも言われています。安定な状況であるため配慮の必要はないとの声も広がってきています。

あきる野では、毎年確認しているオオタカ数は少なくないように見えますが、実は多くの個体は若鳥で、特に秋の渡り時期でその年に生まれたオオタカが多く観察されます。ほとんどの若鳥は、あきる野の留鳥ではなく関東エリア周辺で移動する個体と見られます。なお、あきる野で正確に確認している営巣は2箇所のみで、他にも3箇所程度で繁殖していると思われる。そしてあきる野境付近の市外にはさらに2箇所程度の営巣も確認しています。これらの営巣地は全て里山環境、または市街地付近の緑地に位置しています。一方、あきる野の奥山のオオタカの生息状況は不明ですが、営巣箇所の減少に伴う不安定な状況であると思われる。このように、あきる野西部の山では使われなくなったオオタカの古い営巣と思われる巣は2箇所ほど確認しました。

モニタリングを行っている2箇所のオオタカの営巣は市街地に近接であり、非常に影響される恐れがあります。また、上記に記述したように若鳥の数は比較的が多いとは言え、これら若鳥の死亡率は高いかも知れません。このため、オオタカの生息状況は安定、または不安定であるか、確認する必要があります。今後、更に詳細調査を行う予定です。



渡り時期で確認されたオオタカの若鳥の1羽（左）。奥山で減少していると思われるオオタカの成体が、ヤマドリを捕食する様子も確認しました（右）